

案の定から逸ノ城まで色々あった大相撲
平成 26 年 9 月場所を終えて

<1> 案の定・・・白鵬

白鵬 31 回目の優勝を達成。場所が始まった時からそんな予感が漂っていたが、いつの間にか新入幕の逸ノ城が静かに並走していた。おまけに白鵬が今場所迷走中の新大関豪栄道に一方的な相撲で敗れてしまい、にわかには景色が変わってしまった。そんな中でもゴールに達することができた白鵬自身が一番ホッとしたりと思う。見ている我々でさえも千秋楽が終わって胸をなで下ろしたというのが実感である。

今場所の白鵬は、眼光鋭く土俵上の表情が引きしまっていた。立ち合いの踏み込みは低く速い上に臨機応変の対応も素早く的確に行われ、相手の動きをよく見定めた上で対応していく柔軟さが光っていた。口には出さなかったが「優勝 31 回達成」に並々ならぬ思いを秘めていたに違いない。千代の富士の記録に並び、大鵬の記録までもう一步のところまで来た。

千秋楽のインタビューでアナウンサーが「優勝 32 回」と水を向けると、しばらく絶句の後「暫時休息」とお茶を濁した。しばらくはこの流れを止められる力士が出て来るか否か微妙なところなので、「大鵬を凌ぐ大横綱」の称号を手に入れることは間違いないだろう。

白鵬の優勝回数もさることながら、旭天鵬も 40 才を越えての勝ち越しで歴史に残る記録を打ち立て、まだその記録が伸びて行きそうな状況にある。白鵬はモンゴル人だが旭天鵬は日本国籍を取得している。やがて誰かが議論を始めるに違いないが、千代の富士の大記録に対して国民栄誉賞を出してしまった永田町の皆さんはさぞかし焦ることだろう。(旭天鵬については<4>を参照下さい)

<2> 新入幕にしてやられた

大相撲を見続けていて相撲を良く知っている人は別として、ごく普通のテレビ観戦者の相撲ファン達は逸ノ城という力士の存在はあまりよく知らなかったと思う。中日を過ぎて 7 勝 1 敗、10 日目を終わって 9 勝 1 敗、全勝力士・1 敗力士の欄にその名が出て消えなくなり、やがて対大関戦が始まった。

やや腰高ではあるが低い位置を保ちながら、ある時は力である時は技で、巨体の割には早い身のこなしで相手を圧倒していた。21 才とは思えぬ落ち着き払った無表情な土俵上の姿は不気味な感じすらする。

しかし立ち合いの一步目の踏み込みが小さく、定位置で受けとめるような立ち合いが多いせいか、鋭い突っ込みからの激しい動きで勝機をうかがう勢には完敗した。勢に敗れた一番と白鵬に敗れた一番が逸ノ城の欠点を明らかにしていた感じがする。鶴竜や大関たちが無様な負け方をしたのに比べると、勢の研究成果に拍手を贈りたい。

ことによると来場所は三役に抜擢されるかもしれないが、他の力士達も研究してくると思われるので、来場所も好成績を上げるのは困難ではないかと思う。しかし、太ももが太くて尻の筋肉ががっちりしている力士は大成すると言われていたので期待すべき要素は充分にある。今後の最大の難敵は体重の増えすぎではないかと思っている。遠藤も今大きな壁にぶち当たって跳ね返されている。それもこれも先輩力士達の努力にかかっている。いずれこの二人が中心になって活躍する日が来るだろうが、いまさら日本人だ、モンゴル人だなんて議論はするまいぞ。

<3> 大関が弱すぎる

新大関が誕生して三大関体制になったが、三人合わせて 30 勝にも遠く届かないばかりか辛うじて勝ち越す者まで出る始末。

稀勢の里の前半の相撲を見ていると、何か自分の相撲を変えようとしている雰囲気を感じられた。仕切りの間の姿勢を観察していると、これまでの場所よりも手をつく位置をかなり手前にして、体を小さく丸める体を作っていた。腰高の欠点を是正するつむりの改造実験と見たが、本人が語った訳ではないので事実関係

はわからない。腰高の上に、思いがけない展開になると焦ってしまうという欠点を早く直さないと、大関という地位ゆえに批判を浴びることにもなる。実際に朝日新聞の敗戦報道の文章はかなり批判的な内容だった。私見としては、稀勢の里の腰高の是正には「前みつ狙い」が良いと思うが。

琴奨菊の相撲は日々波があり、場所毎に波がある。彼本来の早い立ち合いの突っ込みと鋭いがぶり寄りにもっと拘る必要がある。自分の型を持っているのにそれに拘って15日間・6場所を走れないのが問題だ。相手にまわしを取られないようにするために、必要以上に固きつくまわしを締めている。これがために自分の体の動きを悪くし、腰の周りに過剰な負担がかかっていると思う。

豪栄道は「新大関のプレッシャー」だけで片付けることができない惨めな結果になり、数場所前の悪さに戻った。思い通りの流れにならなくなると、いなしや叩きでその場を回避しようとする悪い癖が数多く見られた。勝った勝負もあったかもしれないが、殆どはこれが原因で墓穴を掘っていた。稀勢の里の後を継いで「白鵬にだけは勝てる大関」の名を得たが、自身が勝ち越すことすら危ういのでは意味がない。

「白鵬だけが強すぎる」と言う人もいるが、私はこの意見には反対している。大関陣は白鵬と戦う前にすでに黒星を重ねている。つまり「白鵬が強い」のではなく、「大関が弱い」のだ。大関という大幹部の地位にありながら勉強が不足しているとしか思えない。それ以上に、直前三場所の勝ち星だけに拘る（瞬間風速）大関昇進の基準に原因があるのかもしれない。

<4> 高齢力士と若手力士の二極化現象

先々場所あたりまでは遠藤、千代鳳、大砂嵐、佐田の海などの若手力士の進出が話題の中心になっていた。先場所は豪風、嘉風を中心に30代半ばの力士の活躍が目立った。

そして今場所は40才の幕内力士と騒がれた旭天鵬、辛うじてではあったが勝ち越して、歴史年表に刻み込まれるような力士となった。初土俵は平成4年三月場所で、十両に下がってしまった若の里が同期生。新入幕平成10年一月場所、通算勝ち星895勝、幕内勝ち星665勝、年を感じさせない体つきは稽古の成果であるに違いない。そして、モンゴルからの入門の先駆けとなったメンバーの一員で、後続力士達に土俵の外でも大先輩としての様々な役割を果たしているらしい。

35才の新関脇豪風、技能賞の常連安美錦は35才。高齢者の活躍と若手の進出とが入り混じって、大相撲は程良い「時代の境目」を迎えているような気がする。この中間に位置する力士達はもたもたしていると忘れ去られかねない。戦国時代が近付いているような気がして、目が離せない面白さがある。

幕内力士の年齢別人数分布（朝日新聞千秋楽星取表に記載の年齢による）

	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	..	40
横綱									2	1							
大関								2		1							
関脇							1								1		
小結					1	1											
前頭	2	2	2	2		3	6	2	4	2	2	1	1		3		1
合計	2	2	2	2	1	4	7	4	6	4	2	1	1	0	4		1

<5> 土俵の上にも問題が

この場所は前半戦から熱戦が多く客席の満足度も高いように見えたが、立ち合いの乱れが目立った。立ち合いの乱れは「立ちしぶり」、「つかかけ」、「待った」の三種に分類することができるが、何より問題なのは「相手に立つ意志を伝える手段が存在しない」ことにある。本来の立ち合いのあるべき姿としては、手を下して拳を土俵に付ける（手をつく）ことで立つ意志があることを伝え、相手もそうであることで息が合って立ち合いが成立するのであるが、手のつき方が標準化されていないために問題が起きている。両手をつく力士、片手をついておいて立ち合いの瞬間にもう片方の手をチョンつきする力士、両手をチョンつきする力士など様々であることに真の原因が潜んでいる。

さらに遡って見ると、仕切りの最中に相手と視線を合わせていけば互いの呼吸の確認もできるのだが、仕切りを重ねながら相手を見ていない力士があまりにも多い。

根本原因としてこんなところあたりまで遡って改善策を考える必要がある。

手をつかずに中腰のまま相手の動作を睨み、チョンつきのタイミングを見定める力士がいる。相手は両手を下して立ち合いの姿勢に入っているのに、自分のタイミング選びだけをしている力士がいる。千代鳳、栃煌山、稀勢の里、琴奨菊などがこのパターンである。(立ちしぶり)

自分が相手より早く立ちたいだけのために、相手との同期を考えずに一方的につっかける力士がいる。それだけならばまだしも、相手を攪乱するだけのために一方的につっかける力士もいる。今場所は特に逸ノ城の対大関戦で話題になったが、時天空は恒常的にこの手を使っている。(つっかけ)

相手のリズムに上手く合わせられぬために率直な思いで「待った」をすることはあるかもしれないが、相手のリズムを狂わせるために意図的に「待った」をする力士もいる。稀勢の里が終盤で見せたように、自分の作戦が立ち合いの寸前まで決められない力士は、心の迷いから「待った」をすることはある。自らの方針が定まった上で何回かの仕切り直しを繰り返しながら、相手の呼吸も感じて仕切り直しをしていけば、このようなことは起こらないはずだろう。(待った)

無事立ち合いが成立した後は、叩きの応酬が目立った。若手力士が力いっぱい前進相撲で相手を一気に押し切るからこそ勝負が面白いのであって、若荒雄やひところの千代大龍のように二三発突いたら叩き落としてやろうという心構えの相撲では面白くない。

特に若手力士は「目先の勝ち負け」よりも「力を出し切った相撲」を数多くとる必要がある。三年後の自分のためにも先に見える相撲を体験してもらいたいものである。

以上